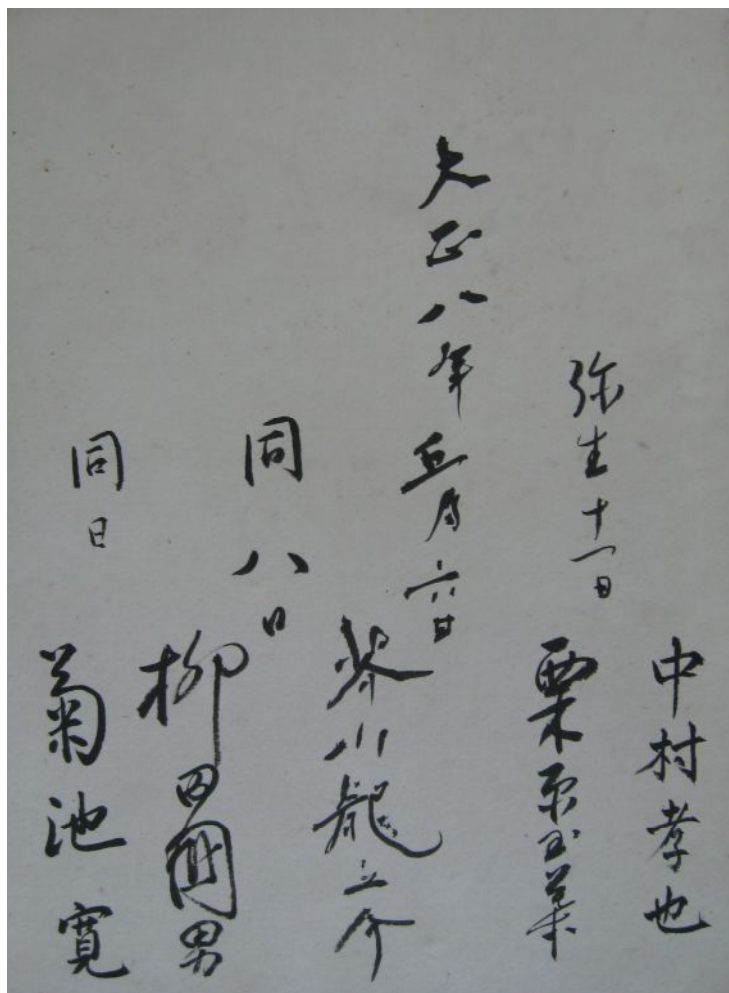


芥川龍之介・菊池寛の二人は、柳田国男と  
県立長崎図書館で初めて会った



大正八年五月六日

弥生十一日

栗原玉葉

中村孝也

同八日

芥川龍之介

柳田国男

同日

菊池寛

## <記帳者の紹介>

### 中村 孝也 1885～1970

日本近世史研究家

大正13(1924)年東大史料編纂所史料編纂官となり、昭和13年国史学科教授となる。  
来崎の前年7月に大学院を修了している。

### 栗原 玉葉 1883～1922

旧吾妻町出身の女流画家

小学校在学中に父を亡くし、兄のもとに身を寄せて梅崎女学校に通った。上京して女子美術学校(現女子美術大学)に通ったが、夜間学校の教壇に立ちながらであった。卒業後、母を東京に招き、母校で教えながら画業に励んだ。大正2(1913)年から文部省美術展覧会に連続入選し、日本画壇で確固たる地位を築いた。

大正9(1920)年3月6日～3月9日「栗原玉葉女史近作画展覧会」が、本館で開催されている。

### 芥川 龍之介 1892～1927

県立長崎図書館訪問の前月、横須賀の海軍機関学校の教官を辞め、大阪毎日新聞社の客員社員となっていた。

3年後の大正11(1922)年5月にも来崎、この時は約1カ月間滞在した。芥川の長崎での行動については、『長崎南蛮余情 永見徳太郎の生涯』大谷利彦 著(1988年 長崎文献社)に詳しく紹介されている。(大正11年の、芥川の芳名録記帳はない。)

### 柳田 国男 1875～1962

民俗学研究者(『遠野物語』は明治43(1910)年刊)

貴族院書記官長という要職にあったが、農政学・民俗学を究めたいと考えていた彼は、長期の調査旅行を繰り返していた。

5月1日に東京を出発し、「家船」について調査するつもりで、呼子、平戸(田助)経由で来崎している。5月11日貴族院付近での火事の報が入り、帰京したが、この旅行が12月の退官の引き金となった。(以前から折り合いが悪かった貴族院議長徳川家達の下解なしに旅行していた。)

### 菊池 寛 1888～1948

作家(『真珠夫人』は大正9(1920)年新聞連載、「文藝春秋」は大正12年創刊)

芥川龍之介とは第一高等学校の同級生だが、菊池が時事新報社記者になってから、親しく話をするようになったと書いている。芥川の紹介で、大阪毎日新聞社の客員社員となっていた。

大正8(1919)年5月4日、芥川と菊池は東京駅を出発。途中、菊池は風邪でひどい頭痛に襲われ岡山で下車し、宿泊する。菊池は、尾道・下関にも宿泊して遅れて来崎した。

二人の署名の日付が異なるのは、そのためである。(二人は、柳田に会ったとは書き残していない。)

<来崎時の様子>

『芥川龍之介全集 第十八巻 書簡』岩波書店(1997年)

①四月三十日 永見徳太郎 宛 芥川龍之介・菊池寛連名

拝啓

.....

実は今 三十日出発のつもりで居りましたが いろいろ差支へが起こって来月四日の特急で立つことになりました。どうか御地到着の際は よろしく御ひきまはし下さい。

.....

四月三十日 芥川龍之介  
菊池寛

永見徳太郎様

永見徳太郎(号 夏汀) 1891～1951 市内銅座町の素封家(倉庫業)

長崎学、南蛮美術に関する収集家としても著名で、文壇・芸術各界の著名人を自宅に招待し、そのコレクションを紹介した。歓待を受けた著名人は、長崎の魅力をいろいろな形で発表し、長崎のブランドイメージ定着に大きく貢献した。

永見家には『其日帖』という芳名帖があったが、その記帳者と本館『芳名録』記帳者には重なりが多い。永見は、美術研究書・写真集などを刊行しているが、長崎での事業に失敗した後、東京で作家活動を送ろうとした時期もあった。

(永見コレクションの多くは神戸市の池長孟の譲渡され、現在神戸市立博物館に池長コレクションの一部として所蔵されている。)

②五月七日 絵葉書 妻 宛 芥川龍之介

長崎へ来た。永見さんの厄介になった。長崎はよい所にて甚感服す。

支那趣味と西洋趣味と雑居してゐる所 殊に妙なり。

異人、支那人 大勢ある町は大抵 石だたみ。橋は大抵 支那風の石橋。

ロオマ旧教のお寺が三つある。皆 可成 大きい。

.....

③五月二十三日 永見徳太郎 宛 封筒欠

拝啓

其後は 御変りもなく御消光の事と存じます。さて 小生の滞在中は何から何まで御世話になり 難有く厚く御礼申上げます。

.....

写真も難有 拝受致しました。右遅れながら 御礼まで 頓首

五月廿三日

芥川龍之介  
菊池寛

永見徳太郎様

写真は 全集第3巻に収録(菊池 芥川 武藤長蔵 永見)

『菊池寛全集 第12巻』文芸春秋(1930年)

①「長崎への旅」(大正8年6月発表)

.....

永見氏の家で、平戸蘭館の図だとか阿蘭船図などと云ふ南蛮趣味の旺溢して居る長崎絵を見せて貰った。

あくる日は、芥川と二人で、浦上の教会堂を見に行った。.....

帰りに、長崎の医学専門学校へ行って斎藤茂吉と会った。

夜、有名な丸山の遊郭を見に行った。

②「半自叙伝」(昭和4年12月発表)

.....

大正八年の正月に「恩讐の彼方に」を書いた。二月に、芥川の尽力で、大阪毎日の客員になった。時事新報社に、二年半ばかりいた。

.....

大正八年二、三月の頃であったか、私は新聞記者をよして初めて暇を得たので、芥川と一緒に長崎へ旅行した。これは、私にとっても芥川にとっても記念すべき旅行だった。この旅行前にも、芥川はキリシタン物を書いてしたが、この旅行によって、さらにその方面の興味が加わったように思う。

私はこの旅行をしながら、自分の思いがけない文壇的出世に夢のごとき思いがして、(おそらくこれが自分の絶頂ではないか)と、ひそかに考えた。そして、とにかくここまでくれば、自分も満足だと思った。

.....

『定本 柳田国男集 別巻第三』筑摩書房(1964年)

「甲寅叢書」(『故郷七十年(改訂版)』所収)

……

購読者の中での珍しい人は、まだ学生時代の芥川龍之介がみたことである。後に世間で芥川の名を見るようになった時、「どこかで会ったことのある名前だが」と思ったりしたが、実は甲寅叢書の熱心な読者の一人であった。……

芥川にはじめて会ったのは、彼がもう一人前になり、大分偉くなってからであった。ある時長崎の図書館に行って、あそこにある古い資料を見てみると、向うから二人連れで、ひょろひょろと背の高いのと、背の低い二人がやって来た。「あの人は」と館長が囁くので、お辞儀をしたのが初対面であった。非常に懐しく思っ「あなたは甲寅叢書の読者でしたね」といふと。「ええ、あれは拝見してをります」といってみた。

連れの人には菊池寛で、この二人連れは背が高いのと横に平たいので、そのころ浅草の十二階とその横にあったパノラマに喩へて「パノラマと凌雲閣」とよくいはれてみた。長崎の物持の好事家で永見徳太郎といふ人の所に泊まってゐるといふことであった。

注) 館長は、初代館長永山時英のこと。

『折口信夫全集 第31巻』中央公論社(1968年)

書簡36 P156(大正8年3月16日)

長崎市東中町54 齋藤茂吉様 気付け 渡辺与茂平様

東京市外西大久保307 折口信夫(封緘はがき)

柳田先生が、そちらで、おはなしなされた相で、さだめて、はじめて御聞きになったあなた方には、御感興のふかかったことだらうと、存じます。

師匠に対して持つて居る弟子の心持ちを、御理会下さいまして、片鱗だけでも、見せて喜ばせてやらう、との御心切、御うれしう存じます。

……

渡辺与茂平(本名 庫輔) 1901～1963 郷土史家(永見徳太郎と縁戚関係あり)

長崎在勤中の齋藤茂吉に師事、「与茂平」と命名してもらう。歌集『つゆじも』にその名が見られる。

芥川龍之介も、その才能を評価しており、渡辺の文章修行に助言を与えていた。芥川の二度の来崎に関しては、宿舎の手配などに奔走し、ほぼ毎日同行していたと考えられる。

郷土史家古賀十二郎(小説『長崎ぶらぶら節』に登場)からも指導を受け、長崎学に関する著作を多数残した。

(渡辺の収集資料の内、刊本類は本館に、歴史資料は長崎歴史文化博物館に、それぞれ「渡辺文庫」として収蔵されている。)